力強い北海道農業の構築に向けて（第一回）

「風ニモマケズ カネ勘定ニモマケヌ 力強い北海道の農業を築け」

北海道大学名誉教授
七戸長生

国連が世界各国に家族農業経営への支援を呼びかける中、わが国では家族農業経営を一層の市場原理のもとに置く農政改革が進められています。

停滞・低迷する日本農業の中で異彩を放つ北海道農業・農村の将来展望とその実現に必要な取り組み、農政のあり方、研究者・研究機関の果たすべき役割などに関して、四人の学識経験者の方から提言をもらいます。

第一回は北大名誉教授の七戸長生氏です。

一．ホッカイドウと名付けられて、はや一五〇年、その現状は

欧米に負けまいと近代国家の建設を目指して懸命に努力していた明治政府の施策の下で、全国各地からの移民の人達によって、未開の原生林が拓かれて、この北辺の大地に農業の基盤が築かれたが、その後の幾多の紆余曲折を経過して、第二次世界大戦後の画期的な機械化と技術革新によってようやく飛躍的な発展を遂げ、今や日本農業の一環を担う重大な食料基地としての地位を占めるまでに至っていることは、ご同慶の至りである。

しかし北海道は、全国の人々から必ずしも正確に認識されていない面もある。例えばその範囲が、四七都道府県の中の一つ

として数えられるせいか、東北六県に新潟県を加えたほどの広さがあるのは、あまり知られていない。さらに農村に入って、いわゆる三〇〇間区画の広い田畑に点在する農家の屋敷構えに注目すると、その年々の高い所得水準とは全くウラハラに、地味でつつましいと言うよりは、むしろミスボラシイ雰囲気さえ感じられる。（もちろん、驚くほどの豪邸もあるが…）ここに出身地（内地）をしのぐような理想郷を創りたいと入植してきた先人たちの夢は、いまだ達成されていない。それどころか、近年は櫛の歯が欠けるように戸数が減り、人口流出が驚くほど進んでいる。思うように仕事の場がないのが直接の原因なのだが、これに伴って高校がなくなり、鉄道の路線が廃止され、医療施設の弱体化が進み、総じて過疎化の波がヒタヒタと進んでいる。

こういった状況を打開しようとする力強い動きは見当たらず、実情を見れば見るほど、とても、元気の良い掛け声ばかりの「提言」などを述べる気にはならない。しかし、何故このように八方ふさがりの状態が生み出されたのか。その本当の原因を、もっと深く考えてみる必要があるのではないか。

七　戸　長　生（しちのへ　ちょうせい）氏

1930年　青森県に生れる（９月25日）
1958年　北海道大学農学部　農業経済学科博士課程修了（農学博士）
　　農林省北海道農業試験場　農林技官
　　農林省農業総合研究所北海道支所　農業経営研究室長を経て
1983年　北海道大学農学部　教授
1989年　北海道大学農学部　学部長（1993年３月まで）
1993年　北海道地域農業研究所　所長
1994年　北海道大学農学部　定年退官、北海道大学　名誉教授
　　酪農学園大学酪農学部食品流通学科　教授
1998年　酪農学園大学酪農学部食品流通学科　退任
　　市立名寄短期大学　学長
2002年　市立名寄短期大学学長を任期満了退任
2003年　北海道地域農業研究所所長　退任
〃　　北海道地域農業研究所顧問　就任

＜主な著書＞
『農業機械化の動態過程』農業総合研究所（1974年）
『新しい農村リーダー』農文協（1987年）
『日本農業の経営問題』北海道大学図書刊行会（1988年）
『経営発展と営農情報』農林統計協会（編著　1990年）
『海外農村視察必携』農文協（1993年）
『世界の農民群像』農文協（1995年）
『論争・近未来の日本農業』」農文協（1998年）
『農業の経営と生活』農文協（共著　2000年）
『地域活性化の基本条件』北海道協同組合通信社（2004年）

二、これで良いのか、営農・生活の将来目標のたて方

北海道の農業について、今、一番心配なことは、若い後継者層では「農家離れ」が急速に進み、年輩の経営者層では、これに引きずられて浮き足立っていることである。本当はもっと自信を持ってほしいのだが…。

若い人たちは、このギャップを知っているのか。よく判らないが、親父の農業がどれほど大きな可能性を持っているかを知らないし、真剣に考えてもいないように見える。（そして安易に街の狭いマンションに住んで、気軽なサラリーマンになるか、そうでなければ、最新式の機械・施設を整えた農業でなければ、今後の発展の展望が開けないように思って過ごしているのではないか。）もし、これが、大筋で当たっているとしたら、このような若者に育っていった原因を突きとめる必要がある。私は次の二つの原因があると思う。

一つは、近年の著しい経済環境の変動や、気象災害の中で、個々の営農が非常に厳しい局面に直面していることである。これを嘆くオヤジの愚痴ばかりが耳に入れば、若者は悲観するしかない。実は、我が家の農業には楽しいことも嬉しいことも沢山あった筈なのだが、そういうときには無口なオヤジは黙って乾杯をしていたのでは…。

もう一つは、営農のための借金のストレスに押しつぶされそうになっている農業者が少なからず存在していること。営農のための借金をすることは、北海道では決して珍しくないし、これをバネにして畜力農業の段階から機械化農業の段階に飛躍した輝かしい経験がある。しかし、高度経済成長が終わり、バブルが弾けたあとの現代では、借金をして波乗りを続けるというのは容易なことではなくなった。いま、何より危険なのは、借金頼りの大型機械化・規模拡大である。それに合わせて耕地の条件や営農の体勢を大幅に変えなければ、それほど能率は上がらないし、生産コストは下がらない。そのため、元金と利息を返せば、あとに残るモウケは期待外れ、という悲劇的なことになりかねない。同じように多額の先行投資をして多収穫や超高泌乳牛をねらうという方向も、地力の問題、乳牛の健康・更新の問題等々が付きまとっている。いずれにしても、こういった大型化を考えるためには、それにふさわしい地区のまとまりをもった体制（例えば大型コンバイン・カントリーエレベータに対応する麦作集団体制）が必要であって、それは個別の営農の枠組みをはるかに超えるものである。

こうした厳しい状況にあるとしたら、営農の基本は、古くから言われてきた通り、適地適作に見合った適正規模が望ましい。その上で最大の純収益をねらうのが本筋だから、出来るだけ能率的に、多くの収量をあげ、それを出来るだけ有利な価格で販

売することが必要である。ところが、従来の営農計画には大きな弱点があった。

それは、折角苦労して作った生産物を、最も有利な条件で売ること、そのための流通、加工、消費という流れを十分調べた上で、最も付加価値が高くなる方向はどれか、そのためには従来の品種をどのように変え、どのような作型で、どういう品質のものを作ることにしたら「少々高値でも欲しい」と言われるような生産物になるのか、こういった経営発展戦略の基本がスッポリ抜ケテイタ。

このように大規模生産・大量生産の方向にばかり関心が集まって、品質・良質の問題がいささか軽んじられてきた原因は、開拓時代からの遠隔地農業の伝統にある。つまり、地場の人口が少なく、その消費量も少ない時代から東京中心の関東圏や大阪中心の関西圏に積み出して、うまく売れれば大成功、というパターンであった。質よりも量ということになる。

もう一つの原因は、比較的早くから協同組織が形成され、地域の農家はできるだけ多く系統組織に出荷し、そこから先は専門の職員の手腕にまかせる。米や麦はもっぱら政府へ売渡す時期も長く続いた。それが、組織まかせの惰性を生み、それ以上のことは責任外という気風を強くしてしまったのである。

さらに第三の原因は、このように大量生産、多量出荷の傾向をもった北海道の農産物のかなりの部分が、実は食品加工産業の加工原料として取り扱われてきたという点である。つまり広い地域で、まとまった量の生産物を、工場が指定した規格・品質に揃えて出荷するというのは、加工業者の側から言えば大変好都合で、前述の遠隔地農業という体質にも合致している。そこで大消費地に近いところに工場を作って、付加価値生産に励むことになった。したがって、北海道は全国屈指の生産量があると威張ってみても、食品加工産業の側から言えば、それは単なる原料供給の下請け部門に過ぎない。この位置関係は、さらに進めて言えば、もっと安い、都合の良い原料が入ってくるのなら、アメリカ産でも中国産にでも、切り替えることがある、というキワドイ話につながるのである。よく考えてみると、北海道に碌に工業が発達していないのも、こういう食品加工の工場が本州の大都市圏に建設されて、その原料供給部門を北海道の農業が担ってきたという歴史的経緯と無関係ではない。

したがって、自分達の生産物が、どこの、どういうニーズを背景にして、どういう買い手によって買い取られ、どのように付加価値資産に結び付けられているか、を時々刻々調べて、大量生産の量的側面ばかりでなく、質的側面にも適切に対応していくことが大切になっており、それは営農計画の面ばかりではなく地域経済計画の面からもゆるがせにできないポイントである。もちろん、これは個々の営農計画の範囲を超えることだから、より広い地区、地帯の農家が連携して取組むべき課題であ

る。

ところで、これからの北海道農業の方向を考えるときに、上述のような営農計画、営農目標の設定だけで十分だろうか。農業が重要な産業であることは多くの人が指摘している。しかし、それが自由で、楽しく、羨ましい憧れの産業であるかといえば、必ずしもそうではない。実際にはいわゆる3K職場（キツイ、キタナイ、キケン）の一つとみられているのが通り相場だ。それには二つの原因があると思う。

一つは農業という仕事が、作物や家畜などの生き物を対象としていて、相手は一年中、一日として休みなく、生育、成長、成熟を続けているが、この過程が順調に進むように手助けするのが農作業。したがって季節により、状況によって作業の種類や内容が大きく変わっていくし、その流れに遅れないように、突貫工事で集中的に処理しなければならないことも少なくない。農繁期には「猫の手も借りたい」と言われるほどに超多忙の時もある。もちろん、永年の様々な技術の改良・進歩でこのピークを乗りきってきたが、それでもなお、農作業に季節性があり、農繁期が生まれることは避けられない。

そしてもう一つの原因は、上述の農繁期の超多忙状態を慢性的に引きずって、年中仕事、仕事で責め立てて、オ金ヲカセゴウ、「兎に角、経済が第一。生活の改善はある程度、経済にゆとりが出来てから考えよう」というモーレツな経済第一主義の

オヤジの気風である。昔は、そのように荒稼ぎをして、お金を貯めて、故郷に戻るという出稼ぎ根性がはびこっていた時代もあったが、今日からいえばこれはまさに生活を犠牲にした長時間労働、超ブラック企業の姿勢そのものであって、人道的にも問題にすべき気風である。

したがって、忙しい農繁期をどのように工夫して改善し、家族皆が、自由で楽しい田園生活を実現するかという課題は、もともと自営業である農業を営んでいる者の、最も中心的な課題であり、これを解決できない者は「経営者失格」ということになる。

もちろん、この難題の解決のヒントは沢山ある。一つは先進地の視察・研修。しかしこの手取り早い方法は、自分が忙しい最中に、当面の仕事をホッポリ投ゲテ研修に行くことになるから、皆の代理で見てきてもらって、その話を聞くというグループ活動でしのぐことになろう。そのほかには、これまでの営農のやり方を大幅に切り替えて、農繁期の形成そのものを防止する（酪農でいえば「放牧酪農」の方向、畑作でいえば「計画的輪作」の方向など）の選択も有力である。しかしその場合にも、収益が大きく減ることを理由にして、前述の「経済が第一、生活は二の次」という形で押し切られることが多い。冷静に計画を立てて、収益が仮に少々減少しても、人件費や肥料費、飼料費が大きく節約できるとしたら、手取りの所得はかえって増加する場合もあるのだから、昔風の荒稼ぎ根性から脱皮することが必要である。こうして農繁期の難関を乗り越えれば、「何より嬉しいケイカク通り、キレイニ仕上ゲテ、カルイ汗」というような鼻歌まじりの、新3K職場が生まれ、一家揃った団ラン生活が築かれるだろう。

三．地域の人々との絆を強めよ

このように情報化時代の呼び声とはウラハラに、自分の足元をジックリと点検し直すことが切実に求められていると考えるのだが、もちろん、その実行のためには少なくとも三～五年の計画的な努力が必要である。例えば特定の作物の多収穫の方向に偏りすぎた路線を修正して安定的な輪作の軌道に乗せるには、多肥・多農薬の投入パターンからの脱却が先決。しかも、この難題を「時計を止めないで」解決することが求められているから本当に大変だ。放牧酪農の方向にしても同様に、計画的な牧区の設定ばかりでなく、草地の造成や改良が先決となる。こういった難題をどうやって克服していくのか。その実例を示してほしいとの声もあろうが、すでに与えられた紙幅も少なくなったので、ここでは、一つ、一つの課題を忠実に、地域の人々の力を借りながら打開し、それを足がかりにして、やがて大きな成果を挙げるまでに伸びていっている実例としてJA青年部や

女性部の先進事例を紹介して、むすびとしたい。（註1を参照のこと）

その注目される第一の点は、若者は概して地域の社会・経済・政治などの動向についての見識が乏しく、視野も狭いものだが、彼らが年来の活動課題に取組む中で、いかに急速に成長しているかという点である。年来の課題の一つとして、「農業を通して、環境、文化、教育の活動を軸に、地域社会に貢献する」というテーマがあることはご承知の通りだろうが、まず近年、親組織であるＪＡ自体の広域合併が進んだため、青年部の組織状況も大きくサマ変わりした。旧来の組織は、いわば幼なナジミの顔ブレだったが、今度は、全く未知の仲間で、経営の中心もサマザマ、地域の社会環境も実に多様で、はじめはギクシャクするのは当然だが、そのうちお互いに話をするうちに、営農を話題にしても、農業をめぐる政策の話をしても、お互いこれほど大きく異なっていることにはじめて気付いて、自分達の視野の狭さや、一面的なとらえ方に驚き、これを機会にお互いに教え合い、学びあうようになったという。このようにフランクに、お互い教えあって行動しようという機運の高まりは、親組織の経営主層も多いに学ぶべき動きであろう。

第二に挙げたいことは、地域の人々への働きかけに際して、自分達の力の及ばない点や力不足の側面をカバーするために、関係者に率直に応援をたのみ、お互いに協力しあい、盛りたてあって、イベントなどを成功させるという「学習」を積み重ねているという点である。例えば地域の住民や子ども達に、農業の素晴らしさを知ってもらおうと、食農教育や食育教室の活動に乗り出している例が多いが、どうやって「農業の中味」を子ども達に伝えるかとなると、自分達自身がやっている春から秋までの作物の一生（畜産の場合は家畜の一生）を正確に勉強し、要領よくまとめて、スッキリと伝えなければならない。これがあってこそ、イモホリもイネカリも、チチシボリ実習の意義も決定的に変わってくる。ここで青年部らしく４Ｈのベテランの助けを借りたり、スライドやＤＶＤの得意なメンバーの力を動員したり、さらに、この生産物を調理して、とれたての「旬の味覚」を引き出すには、女性部のベテランの援軍を求めるといった形に展開していく。さらにこれを地域のイベントと結びつけるには、町村の商工会の青年部とも連携しなければならない。こういった具合に彼らの活動を取り巻く世界がドンドン拡がっていくことによって、さらに地域の農産物の消費拡大のキャンペーンなどへの取り組みにも、画期的な変化が生まれつつある。同時にこういったイベントを企画し、実行していく自信やノウハウが蓄積されているのである。

さらに第三に、こういった若い力の結束が、前述のような個別の営農問題や生活課題の解決に対しても、直接・間接に影響を与え、まるで「ヒョウタンから駒」と言われるような結果を

もたらしている事例さえ生まれている。その顕著な例として、道南のある女性部で生まれたケースを紹介すると、若いオカアサンのメンバーが旧来の古いイエのシキタリに悩んでいた（註2を参照）が、これを打開するために勇気を出して、女性部主導の「産直活動」に参加し、積極的に取り組む中で、彼女の隠れた才能（商才）が一挙に開花したのか、直売の実績をグングン伸ばし、組織活動全体をリードすると同時に、我が家の農産物販売を代表するほどの地位を占めるに至って、永年の悩みのタネも解決したというケースがある。

こういった事例を見るにつけても、組織に結集した若い力が、当たって砕けろと元気を出して第一歩を踏み出すことが発端となって、あとは勇気とヤル気がありさえすれば、次から次へと、応援する人、協力する人が現れて、次のステップへと展開していく中で、個人的な積年の課題解決に大きくつながるような場面を含みながら発展していくことが判る。これこそまさに「地域の絆」というものではないだろうか。

註1　農家戸数がドンドン減少し、その農家の後継者層が主力を占める青年部も激減して、組織体制もガタガタになっているのではないか、そんなところに先進事例として参考になるようなものがあるのか、と心配する向きもあるかもしれないので一言、註記しておく。

確かに全般的にいえばそういう傾向はあるが、その中のわずか五％か、一〇％にすぎないのだが、そういう悪条件にモマレテ、むしろますます活性化して行き、これがやがて全道のＪＡ活動を強力にリードしていく原動力になりそうな気配をみせている事例が認められる。私は、過去二〇年間の、ＪＡ青年部の全道活動実績発表大会の記録（全道十二ブロックから選出された毎年六事例、延べ一二〇の事例の記録を通読して、強く印象づけられた。一つ、一つの活動はタヨリナイが、周りから励まされ、助けられながら、それらの力を巻き込んで大きな原動力となっているのである。

註2　彼女が嫁入りして、子供が出来て小学校に行くようになった時、旧来の「イエ」のシキタリに突き当たった。それは子供のノート一冊、消しゴム一箇を買うためにも、いちいち、家長のジイサンからお金をもらって買ってくるというシキタリであった。つまり、その程度の小遣銭さえ自由にならないという古いシキタリから脱却するには、産直の直売で現金を手に入れることによって活路を拓くしかなかったのである。

幸いにして、その産直活動の拠点の「道の駅」には、観光客もよく現れるので、「商才」発揮のチャンスをもたらしたらしい。この産直活動は、今や全国三位の売り上げ高を誇っているという。